

特別企画「ディケンズと帝国」論文1

## 『ドンビー父子』

中国への旅と新しい家族の誕生

Why Does Dickens Make Florence's Travel to China  
a Parable of Domestic Happiness?

松村 豊子

Toyoko MATSUMURA

### 1 旅と父権の変容

『ドンビー父子』の正式な表題は『卸売り、小売り、輸出業ドンビー父子商会との取り引き』であり、1846年10月から48年4月にかけて月刊分冊出版された。この小説がディケンズの他の長編小説と一線を画する「モダンな」作品であることは、鉄道の発達による生活形態の急激な変化に注目するRaymond Williamsはじめ多くの批評家が指摘するところである(Williams 163-64)。そして、ドンビー家の家族の離散と再編成は、この社会的変化を直接的に反映していると思われる。この小説は、表題から連想される同父子商会の栄枯盛衰の物語でなく、主人公ドンビーと彼の一人娘フロレンスを中心にした家族の物語(父親による家族支配の終焉と娘による父権の權威の拡散)である。

ドンビーは「父と息子」を中心にした同商会の発展繁栄を夢見るが、彼の夢は妻の死、跡取り息子の夭折、後妻の出奔、家庭内外の使用人たちの裏切り、会社の倒産により無残にも敗れる。このような父親の自己破綻の背景には、勿論、1832年の議会法の改正とそれに伴う諸々の法律の自由化(34年の救貧法の改正、37年の遺言法の制定による世襲制の廃止、30年代及び40年代の保護貿易の廃止、57年に制定された離婚法等)に代表される自由主義謳歌の時代思潮がある。ドンビーは時流に逆行し、家族及び使用人を自由意志をもった個人として認めなかった。つまり、彼は自ら財産及び權威を独占するにとどまらず、それらを息子に世襲的に継承しようとする支配的父親の典型だったので、自己破綻を免れなかったのである。そして、この前近代的な家族を再編するのが、「家庭の精霊」、

フロレンスである。彼女は父親から疎外され続けた結果、継母イーディスの出走を機会に父親の元を去り、相思相愛の仲だったウォルター・ゲイと結婚する。そして、彼女は夫の商用の旅に同行し、ロンドンから中国（広東）まで往復の旅をし、洋上で新しい家族を形成する。

フロレンスの中国行きに関して見逃せないことは、彼女が自由貿易商人の妻として夫の海外渡航に同行すること、彼女がアジア海域の洋上で築く家族生活が産業革命後に誕生したと言われる核家族、すなわち、地縁・血縁という共同体的干渉を全く排除した「閉鎖的で」、夫婦愛・親子愛・家庭愛を旨とする「情愛家族」の理念的典型であることの二点である。<sup>1</sup> この洋上家族はドンビーを中心とした父親支配の家族と好対照をなしている。ヴィクトリア朝小説のヒロインというと「清く」、「正しく」、「従順な」という静的・受動的なイメージが被さりがちだが、フロレンスは駆け落ち結婚し、帝国へ赴くだけでなく、尚且つ、洋上出産するという極めて特異なヒロイン、言い換えると、父親の支配に屈しない意志と行動力を備えたヒロインなのである。

そして、ここで問題になるのが、父権制社会における父権の主体である。<sup>2</sup> 彼女のはるかなる旅の主な動機づけは、経済的には独占法廃止による自由主義貿易であり、家族関係に照らすと、父権支配からの解放である。この解放と平行して、彼女は父親から弟ポールへ父権の権威を移行し、弟の言動に準じて自らの行動を律し、彼が夭折した後はウォルターの姿に弟の面影を投影し、彼と兄妹の契りを結ぶ。その後、父親の家を出た彼女はウォルターと結婚し、もう一人のポールの母親となる。勿論、二人は弟の墓前に結婚の報告をするのを忘れない。弟の死から息子の誕生まで、彼女はウォルター、イーディス、そして、ドンビーに“Remember Walter, dear Papa”（191）という弟の別れの言葉を執拗に繰り返す。つまり、彼女は父権継承の神話を創り出しているのだが、ディケンズはこれを嘘だとして斥けず、ドンビーから他の選択肢をすべて奪い、最終的に彼に受諾させる。父権の主体の混乱から父親と息子の対立・離反が生じることは、『万人の道』（*The Way of All Flesh*, 1903）の例を挙げるまでもないであろう。ディケンズは『ドンビー父子』において「父と息子」の対立を「父と娘」のそれに置換し、親子間の断絶と同時に和解・権威の継承を成立可能にしている。

『ドンビー父子』を旅物語として、また、旅とは逆に家庭という一定の場における家族の物語として読むという、奇異に聞こえるかもしれないが、ここでは家族形態の変容は旅のモチーフなしには語れないほど大きな変革として描かれている。登場人物たちの旅行走行距離の総計は、ディケンズの他の作品とは比較にならない程長い。ドンビーによるヨーロッパへの復讐追跡の旅、フロレンスとウォルターによる中国への往復の旅、服役囚アリス・マーウッドによるオースト

リアへの往復の旅等。ここでは鉄道による国内の旅はもとより、船舶を利用した帝国全域への多種多様な旅が紹介されている。しかも、旅人は皆ロンドンに戻る。旅人たちの帰郷という点において、本作品における海外渡航の目的は、次作『デイヴィッド・コパーフィールド』（1849-50）等の作品で奨励される、国内の道徳的浄化と植民地における経済的成功とを主目的とするオーストラリア移民とは基本的に異なる。<sup>3</sup> 旅とは元来旅人に故国と外国、既存の文化と新たな文化、こちら側とむこう側との間の絶え間ない交渉を迫り、物理的・心理的境界線の引き直しを強要する（Minh-ha 9）。従って、旅の目的地がはるか遠い未知の地であれば、旅人の自己認識は大きく変容する。そして、帰郷する彼ないし彼女を迎える家族も以前とは異なる新たな家族関係を模索することになる。旅は『ドンビー父子』では過去と現在との断絶と同時に、過去・現在・未来の連続性を表すメタファーとなっている。

19世紀半ばでは、自由貿易は未だ帝国主義的植民地支配と関連付けられず、独占支配からの解放として広く謳歌された。この時期における帝国への旅を家族形成の変容という視点から考察すると、家庭の平和という標語のもとに称揚され始めた家族像と自由貿易・自由競争との密接な関係が明白になる。以下、自由貿易による帝国進出と国内における家庭崇拜との接点を描いた小説として『ドンビー父子』を読み、自由貿易・自由競争が家族形態にどのように影響するかを明らかにしたい。

## 2 自由貿易がもたらす解放

19世紀半ば当時、アジア海域は200年以上にわたる東インド会社の独占貿易から解放され、自由貿易商人が活躍する場であった。この経済的な解放を背景として、フロレンスは「大きな時計、砂糖、ティースプーン」という自助の精神による立身出世には欠かせない小道具が設えられた狭い船室を居場所としている。何故か。彼女が夫と共に乗船した船はほぼ一年かけてユーラシア大陸の西の果てから東の果てに点在する主要貿易港に立ち寄りながら、ロンドンと広東との間を往復したと思われる（横井50）。また、この長い航海の間、彼女は船室を居心地のいい家庭とし、ここで夫の身の周りの世話をし、息子を出産養育したと思われる。「自由」の海原を航行する船と親子三人からなる洋上家族。ディケンズはこの家族を地縁・血縁のしがらみから解放された核家族の理念的原型として描いているのである。

夫婦及び親子の情愛、性役割の再編成、公的領域と私的領域の分離は「閉鎖的情愛家族」の一般的な特徴として挙げられることが多い。まず、情愛の重視について述べよう。フロレンスとウォルターが如何に強い愛情で結びついているか

は、二人のポールの誕生場面を比較すると一目瞭然である。“My child was born at sea, Papa. I prayed to God (and so did Walter for me) to spare me, that I might come home.” (844) フロレンスは父母子の間に介在する一体感を自明の理として、息子ポールの誕生を帰国早々にドンビーにこのように簡潔に報告する。これに対し、本作品の冒頭で紹介されるドンビー家の跡取り息子ポールの誕生場面では、父母子の一体感がいかに欠落しているかが数ページにわたり長々と説明される。ドンビーは妻を所有する価値がある「家具」の一つとしか考えないため、瀕死の彼女に全く共感できない。また、彼は幼い息子とも会社の共同経営者としての父子関係しか築けない。ドンビーがフロレンスの感情崇拜を理解し、家族間の情愛の必要性に目覚めるのは、彼が家族の離反と会社の破産を経験した後である。

性役割の再編成について言えば、産業革命後、家族の経済的な基盤はそれ以前の自給自足的な家庭内労働から家庭外における労働の賃金化へ変化した。この変化に伴い、賃金換算されない家庭内労働の位置づけは、周知のように、議論的となった。1830年代から世紀半ばにかけて、実に夥しい量の女性のための手引書が出版された。それらの手引書が目指したことは、男性は一家の働き手として家庭の外で働き、女性は家庭内の仕事を引き受けるという性役割分担に関する共通認識の定着であった。<sup>4</sup> フロレンスの父親や夫に対する揺らぐことのない信頼と従順さは、セアラ・エリス等が説く女性ための道徳規範の最たる例と言える。

公的領域と私的領域は性役割のこのような再編成に応じて分離された。核家族の経済的基盤が産業革命後の自由競争にあったこと、また、この競争が年代を経るごとに一層過激になったことを考えれば、家庭が熾烈な競争原理から隔絶した私的領域として区別され、家族の避難所として崇拜されたもの当然であろう。フロレンスが乗船した船は、国籍及び人種の境界線を越えた自由競争真っ只中のアジア海域という公的領域から隔絶された私的領域として描かれている。そして、彼女は船室と外界の競争・労働の場との境界線を明確にし、船室を家族の唯一の避難場所にしていく。このように「家庭の精霊」の居場所を定義すると、父親から兄弟への権威の移行・拡散は、最終的に家庭という場の権威に変換されると言っても過言ではないだろう。

ところで、フロレンスはこのように当時流布していた家庭イデオロギーを体現するため、船内（特に船室）を居場所としているが、ウォルターはどうだろうか。彼も植民地とかかわった形跡はない。理由の一つはディケンズの対植民地姿勢に求められる。1840年代が飢饉と貧困と労働争議の時代であり、ディケンズが貧民救済策の一つとして特権階級による利潤の独占を撤廃する自由貿易を提唱したことは繰り返すまでもないであろう。例えば、『鐘』(1844)では貧しい農夫が要求する「より良い家庭、より良い食べ物、より寛容な法律」を退ける貴族階

級の道徳的墮落ぶりが揶揄されている。しかし、ディケンズの自由貿易に対する態度は曖昧である。<sup>5</sup> 彼は自由貿易が国内にもたらす経済的利益に注目するだけで、一般に文明化と呼ばれる植民地との政治的社会的交渉については否定的である。このことは『ドンビー父子』において現地事情が全く語られないことから明らかであろう。一例を挙げると、船荷運搬人として成功するウォルターの積荷の中には、対中国貿易の主要品目の一つだったアヘンが含まれていたに違いないのだが、アヘンへの言及は一切ない。ここでは、植民地はあくまでイギリス産の商品と船が自由に出入りし、ロンドンの港を活気付ける海外市場の役割しか果たさない。

では、ディケンズは地縁・血縁による人間関係を断ち切った、自由競争による利潤追求の道徳性を問題にしなかったのか。否。彼はこの道徳的善悪を国内に限定した問題として呈示している。つまり、『ドンビー父子』では、自由競争に関して、イギリス国内と国外では異なる基準が設定されているため、自由競争は一方では家族の結束を固め、経済的利益をもたらす、他方では従来の経済組織と家族形態を破壊する。海外でフロレンスに幸運をもたらす自由競争と新しい家族形態は、国内におけるドンビーの父権支配を根底から覆し、彼の家庭及び会社を破綻させる主要因となる。

### 3 家庭内反乱

本作品の冒頭で紹介されるドンビーは、家族及びドンビー父子商会に君臨する支配的家父長である。長年待ちわびた息子の誕生に狂喜するあまり、彼は彼自身が世界の中心にいるような錯覚さえ抱く。“The earth was made for Dombey and Son to trade in, and the sun and moon were made to give them light.” (2) 勿論、このように過度な自己顕示欲と支配欲は家族の意図的あるいは無意識の裏切り行為によって戒められ、彼は遂に自らの無知無能を自覚することになる。

では、家族が反旗を翻す父権支配とは一体何なのか。周知のように、イギリスでは中世以降、父親または夫が家族という城の主であり、支配者であり、法律上の代表者であった。長男は父親から財産を排他的・独占的に相続し、経済的主導権を掌握することによって、家族の中で支配的地位を占めた。産業革命以前の社会では、このような父親から息子への世襲的継承が法律的に干渉されることはなかった。しかし、19世紀になると、家族法は先述したように次々と民主化され、父権及び夫権は制限された（山本134-37）。イーディスのドンビーに対する別居の申し出、また、フロレンスによるドンビー家の再編成はこのような家族法の改正なくしてはありえない。ドンビーが具現化する支配的父親像は、結局のところ、産業革命前の父権家族を拠り所にしていくので、彼は家族の反逆を免れないのであ

る。ここでは彼の父権支配を根底から覆す出来事として次の三つを挙げたい。

第一に挙げるべきことは息子の死であろう。何故なら、彼の死は父親から息子への財産の相続と権威の継承に終止符を打つからである。ドンビーは事態收拾のために、イーディスと再婚したのであるが、ディケンズは彼に別の選択肢を示唆している。ドンビー父子商会は1856年の会社設立法（これにより、個人でなく会社が債務責任を有限的に負う株式会社の設立が認可される）以前に設立された会社であり、契約及び債務に対して共同経営者が無限に責任を負うという旧式の会社である（Waters 43-44）。共同経営者が互いに相手の損失を補填し、互いの名前が会社の信用を裏付けるすとなれば、その組み合わせは当然父親と息子という近親者になるのだろう。しかし、会社名の「息子」は血を分けた息子でなく娘婿が継承しても支障はなかった。何故なら、1837年の世襲制の廃止により、父親は遺言により娘に財産を遺すことが可能になり、しかも、新興商人であるドンビーには彼個人の意志で自由に贈与できない限嗣不動産（例えば、先祖伝来の土地家屋）がなかったのだから。以前の結婚において「息子」を既に亡くしたイーディスは、勿論、この「娘」の筋書きを採択する。

イーディスの反逆について興味深いことは、彼女がいなければ、フロレンスがドンビーの元を去り、新しい家庭を築けなかったことである。フロレンスの継母になったイーディスはドンビーの意志に逆らい、まず、フロレンスを中心にした情愛家族を築こうとする。しかし、これに失敗すると、別居を提案する。この申し出も却下されると、彼女は最後の手段としてドンビーの使用人との出奔を偽装し、彼を別居せざるをえない状況に追込む。他方、妻に裏切られたドンビーは怒りの矛先を娘へ向け、娘を家出に駆り立てる。父・母・娘の言動はこのように相互に影響する。イーディスの再婚・出奔・別居騒動はフロレンスを父親崇拜の呪縛から一旦解放し、彼女の新たな旅立ちを可能にしている。イーディスは市場に出回る「商品」にしかアイデンティティを見出せず、父権支配に追従する自己を激しく嫌悪するが故に、フロレンスが希求する家族の情愛的絆に活路を見出そうとしたと考えられる。ドンビーの暴力がフロレンスの胸に残した“the darkening mark of an angry hand”（569）は、崩壊すべき古い家族形態の名残であるため、新しい家族生活によって跡形もなく消える。

第三点目はドンビーが同商会の経営を一任していたカーカーの裏切りである。優越的な支配権を個人の努力なく先代から継承したドンビーに彼自身もまた自由競争の真っ只中にいることを自覚させる点で、カーカーの役割は他の二人の役割よりはるかに重要である。産業革命以前の父権家族では、徒弟・家事使用人も社会的には家族の一員と認められていた。周知のように、1851年の国政調査でも同居する使用人は世帯の一員とみなされた。従って、カーカーは兄と共に父親

の代からドンビー父子商会で働いていたので、ドンビーがほぼ無条件でカーカーを信頼し、家族の一員とみなしたとしても不思議はない。ドンビーの落ち度は、カーカーが家族と絶縁し、利潤の追求に邁進する「鉄の時代」の申し子であることを見逃したことである。家族関係を否定するカーカーは、ドンビーの娘婿になるよりも、彼から「父」の地位を奪う道を選ぶ。但し、ディケンズはこの作品において「息子」亡き後の、権威の正当な継承方法を模索しているのだから、カーカーの背信行為（公金横領と人妻との駆け落ち）は厳しく罰せられる。カーカーはドンビーの執拗な追跡と闘争本能に負け、線路に墜落し、機関車に轢き殺される。彼の引き千切られた死体を見たドンビーが気絶するという結末ほど苛烈な自由競争の本質を物語るものはないであろう。“When the traveller who had been recognised, recovered from a swoon, he saw them bringing from a distance something covered, that lay heavy and still, upon a board, between four men, and saw that others drove some dogs away that sniffed upon the road, and soaked his blood up, with a train of ashes.”（653）家族に服従を強いた父親が旅の終りに見たものは、自由競争に敗れた者の残骸だったのである。

フロレンスが旅から戻った時、ドンビーは既に破産し、自殺寸前まで心理的に追込まれている。“I am changed. I am penitent. I know my fault. I know my duty now. Papa, don't cast me off or I shall die [ . . . ]. Never let us be parted any more, Papa. Never let us be parted any more.”（706）フロレンスはこのように一方的に父親に謝罪するが、これは彼女の父権神話の総仕上げとなっている。何故なら、彼女は父権の権威を父親から弟へ、さらには、夫・息子へ移行・拡散する過程に再び父親を加える一方、ドンビーは家も会社も失い、もはや単独で権威を維持できないから。父親と娘の離反・和解の背景に、父親による父権の独占的掌握が不可能になった時代背景があったことは見逃せない。

#### 4 結び

『ドンビー父子』を旅と家族形態の変容として読むと、父親による父権の独占的支配がいかに自由主義謳歌の時代思潮と相容れなかったかが明らかになる。ヴィクトリア朝の家庭イデオロギーというと、性役割の分担と公私領域の分離により、女性は家庭内へ囲い込まれる一方、父親ないし夫による父権・夫権の行使力は強化されたと画一的に考えられがちである。しかし、少なくとも家族の情愛を旨とする家庭小説では、父権支配はもはや成立不可能であり、父権の権威の移行・拡散と情愛志向が大前提となる。そして、情愛志向が強い場合には、クレナム夫人の例を挙げるまでもなく、性役割及び公私領域の境界線はしばしば曖昧になる。極言すれば、家族間の力関係はもはや一定でなく、個々の状況に応じて変

化する動的なものになったのである。『ドンビー父子』は確かにこのような家族の変容を主要テーマにしている。

本作品は同時期に出版された『虚栄の市』( *Vanity Fair*, 1847-48) や『嵐が丘』( *Wuthering Heights*, 1847) と同様に「変化」の時代における一家族ないし二家族の栄枯盛衰と家族形成の質的变化をテーマにした、ディケンズの最初の家庭小説だが (Marcus 27), ディケンズの斬新さは父権の変容と自由貿易による帝国進出との関連性に着目した点にある。自由貿易・自由競争という動機づけがなければ、フロレンスによる新しい家族形成もドンビーによる支配的父権家族の崩壊もなかったのだから。フロレンスの未知の国、中国への旅は自由主義謳歌の時代への期待と不安を表し、尚且つ、ドンビーが具現化する、解体する父権支配の迫りに拮抗すべき力強いメタファーとして機能しているのである。

## 注

本稿はディケンズ・フェロウシップ日本支部秋季総会(2000年10月7日、於甲南大学)において口頭発表した内容に加筆修正したものである。尚、口頭発表した内容の一部は「新しい時代の到来と父親支配の終焉 『ドンビー父子』を中心に」として既に『津田塾大学言語文化研究所報』15号(2000年12月)に発表したもので、ここではフロレンスの中国への旅に焦点を当てた。

- 1 一般に核家族と呼ばれる「閉鎖的情緒家族」及びロマンチック・ラブの誕生事情についてはエドワード・ショーター『近代家族の形成』及びLawrence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England 1500 - 1800*を参照。
- 2 ウォルターの視点から中国への旅を解釈すると、この旅は現実離れした御伽噺となり、新しい家族と古い家族との間に関連性はないことになる。しかし、父権の権威を父親から兄弟へ移行するフロレンスの視点に着目すると、新旧二つの家族の間には、たとえ曖昧であるにしても、関連性があることになる。本作品に関する既存の批評の中では、前者の御伽噺の立場をとる研究家が圧倒的に多かったが、家族史に関する研究が進んだ昨今では後者の立場をとる研究者も出現し始めている。Catherine Watersはディケンズの小説における家族の変容に注目し、情愛志向が血縁関係による家族の継続性を断ち切る危険性を指摘している(Waters 57)。啓蒙主義運動の台頭以降、父権の権威が父親だけでなく兄弟の間に拡散し、曖昧になったことについてはリン・ハント『フランス革命と家族ロマンス』第3章を参照。
- 3 『デイヴィッド・コパーフィールド』における移民の多様な目的及び方法については、松村昌家「ヴィクトリア時代の移民 その現実と虚構」編著『民衆の文化誌』を参照。
- 4 1818年から1848年にかけて出版された手引書と小説との関連性についてはArmstrong, Chap. 4を参照。
- 5 Suvendrini Pereraによると、ディケンズは1850年代前半までは自由貿易を軍隊主体の独

占貿易からの解放として全面的に支持したということになる(Perera 607)。しかし、ディケンズの対植民地姿勢は彼が無条件で自由貿易に賛同したとは思えないほど排他的である。自由貿易に対するディケンズの曖昧な姿勢については、Michael Goldberg, *Dickens and Carlyle*を参照。

## 引用文献

- Armstrong, Nancy. *Desire and Domestic Fiction: A Political History of the Novel*. Oxford: Oxford UP, 1987.
- Dickens, Charles. *Dombey and Son*. Ed. Alan Horseman. Oxford World Classics. Oxford: Oxford UP, 1997.
- Goldberg, Michael. *Dickens and Carlyle*. Athens: Georgia UP, 1972.
- Lawrence, Stone. *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800*. London: Harper Torchbooks, 1977.
- Minh-ha, Trinh T. "Other than myself / my other self." *Travellers' Tales*. Ed. George Roberts & Melinda Mash. London: Routledge, 1994.
- Perera, Suvendrini. "Wholesale, Retail and for Exportation: Empire and the Family Business in *Dombey and Son*." *Victorian Studies* 33. 4 (1990): 603-20.
- Stone, Marcus. *Dickens from Pickwick to Dombey*. New York: W. W. Norton, 1965.
- Waters, Catherine. *Dickens and the Politics of the Family*. Cambridge: Cambridge UP, 1997.
- Williams, Raymond. *The Country and the City*. London: Chatto & Windus, 1973.
- リン・ハント『フランス革命と家族ロマンス』西川長夫他訳(平凡社, 1999).
- 松村昌家「ヴィクトリア時代の移民 その現実と虚構」編著『民衆の文化誌』(研究社, 1996).
- エドワード・ショーター『近代家族の形成』田中俊宏他訳(昭和堂, 1987).
- 山本笑子「イギリス産業革命と家族」中川善之助他編『家族 家族問題と家族法』(酒井書店, 1980).
- 横井勝彦『アジアの海の大英帝国』(同文館, 1988).